



**2012年 5月号**  
**児童養護施設一関藤の園**  
 〒021-0061  
 一関市山目字館2-5  
 Tel 0191-23-1544  
 Fax 0191-23-1545  
[ichi.fujinosono@mirror.ocn.ne.jp](mailto:ichi.fujinosono@mirror.ocn.ne.jp)

### 創立五十周年と私たちの想い

社会福祉法人ふじの園

理事長 中西 秀吉

時の流れの速さには、ただ驚くばかりですが、児童養護施設一関藤の園が今年、創立五十周年を迎えます。

本来なら、多くの方々をお迎えて盛大に式典を行うべきところですが、昨年三月の東日本大震災により、私たちの一関藤の園も大きな被害を受け、時間をかけて検討した結果、改築することに決定し、本年四月やつとその施設の解体を終えたところです。子どもたちは、仮設の施設で不自由な生活を続けており、一日も早い施設の完成が望まれています。

このような状況の中で創立五十周年記念の行事を行うことには、抵抗感があり、新しい施設の完成後にしてはとの意見もありましたが、創立五十周年という節目は節目として大

びました。人の痛みを自分の痛みとして受け止める心、我慢することの大切さ、人と人との絆の大切さ、人は大自然の中の一員であり、その中でしか生きてゆけないことなどです。

これから、改築される施設が計画通りに進められるよう、心をひとつにみんな頑張つてまいります。

#### 五十周年を

#### 迎えたことに感謝

一関藤の園 園長

マウエル・クリスタ

お蔭様で一関藤の園は、今年五月、五十周年を迎えます。今までに、たくさん子どもたちを社会に送り出すことができました。五十年の間、多くの方々に支えられ、導いて下さったことに感謝いたします。

特に、感謝の言葉を述べたいのは、スイスにあるベトレム外国宣教会の本部で晩年を過ごしていらつしやる藤の園の創立者

エグロツフ神父様(92歳)です。エグロツフ神父様を通して、ベトレム外国宣教会のお蔭で児童養護施設一関藤の園が今も存在しています。

今年二月にドイツに行った時に、五十年前の初代の園長だったラインガルデイス・アルタウス(91歳)に会つてきました。藤の園の五十周年について話し掛けると、たくさんさんの思い出を話して下さいました。「藤の園を地域の人たちに知ってもらうためによく子ども

たちを連れて買い物に行きました。地域の皆様から本当に支えられて助かりました」という話でした。

今、私たちは、これらの五十年を見据えて、新しい一歩を踏み出そうとしております。地域に根ざした施設になり続けることができればよいように・・・。

これからも変わらぬご支援とご指導をお願いいたします。そして、子どもたちを温かく見守って頂ければ幸いです。

### 蘭梅山

四月二十九日、前当法人の理事長で、五十年前に藤の園が創立される時にもたいへんご尽力頂いた本田守男先生がご帰天されました。八十六年と十一カ月の生涯でした。

本田先生は、青森の藤聖母園に長く奉職され、その生涯を子どもたちの幸せのために尽くしてこられました。敬虔なカトリック信者でもあり、私たちの精神的な支柱でもありました。改めて、ご冥福をお祈りしたいと思います。

昨年、支援して下さっている方のお一人が当園を訪ねて下さいました。その方との話の中に「人間は、どんな人でも生まれる時に神様から使命(ミッション)を与えられてくるような気がします。与えられた使命を果たしていきましよう」と話していました。

本田先生もきつと神様の使命を果たれ、天国に旅立ったのだと思います。本田先生が教えてくださった「三つ子の魂」の話や「関わり治療」のことなど、先生の遺志を受け継いでいきたいと思ひます。ねぶたの時季に何度も青森に招待して頂きました。あの時の本田先生のお姿が昨日のように思ひ出されます。



#### 今、自分ができていることを！・・・

この一瞬は、もう二度と再現できません。生まれた場所も生まれた時代も育った環境も違う人たちが「藤の園」という存在を通して、ここに集まり、この瞬間を迎えたこと・・・

# Fujinosono Reconstruction

## 《藤の園の再建》

東日本大震災により園舎が被災したことから、2ヶ月後の5月はじめには改築が決定しました。ただちに基本設計、実施設計を進め、1年後の平成24年の10月末の完成を目指しました。昨年10月には仮設園舎の建設が始まり、12月には完成し仮設園舎での生活が始まりました。しかし、当初の改築計画は、昨秋以降の急激な建築資材の高騰や人手不足などから規模を縮小せざるを得ない状況となりました。現在、基本設計の見直しをしているところです。



### 仮設建設の安全を祈る祝別

2011年10月29日、仮設園舎の建設の安全を祈願する祝別を一関カトリック教会の佐藤守也神父様をお迎えして執り行いました。



### いよいよ仮設園舎建設

2011年11月、敷地内のグラウンドに仮設園舎の建設が始まりました。12月中旬の完成を目指して急ピッチで建設が進みました。



### 仮設園舎の完成まであと一息

2011年11月末、仮設園舎の外観がほぼ完成しました。これから内装工事が始まります。連日、夜遅くまで作業をして下さいました。



### 新園舎での生活がスタート

2011年12月18日、仮設園舎が完成し仮設園舎での生活がスタートしました。



### 旧園舎の解体工事

2月20日から内部の解体工事が始まりました。



### 旧園舎の解体が進む①

重機による解体が始まり、日ごとに園舎が取り壊されていきました。



### 旧園舎の解体が進む ②

1ヶ月後、ほぼ順調に進み、だんだん園舎の形がなくなっていました。



### 更地になった敷地

4月25日、解体工事が終わり、更地になりました。この場所に新しい園舎が建つ予定です。



### こいのぼりと仮設園舎

更地になった敷地に鯉のぼり。来年の5月の新園舎の完成を目指しています。

## カトリック施設としての使命

「平和を求めぬ祈りの最後の一節に「与えるから受け、許すから許され、自分を捨てて死に永遠の命をいただくのですから・・・」という言葉があります。

カトリック施設としての使命は、人のために生きることを自分の生き方とする、子どもをのちからしっかりと身に付けていく、そういう生き方を子どもたちと共にしようとする大人がいる、そういう施設であることが求められています。

そのためには、何よりも第一に、子どもたちを温かく包み込み、被包感を感じることができ、施設でなければなりません。自分の存在を包み込んでくれる温かさ、無条件に愛されている雰囲気を実感するとき、子どもたちは、大きく成長していくことができます。

自己尊重のニーズを思春期に満たすことができれば、失敗を恐れず、自分の可能性を生かそうとします。その

先に人のために生きていきたいと考えるようになるのです。

私たちは、改めて藤の園の存在理由を確認しなければならぬと思っています。

## カリタス・マザーの存在

私たちは、親しみを込めてカリタス・マザーと呼んでいます。カリタス・マザーは、昭和三十三年の開設当初から藤の園一筋、藤の園のために働き続けてきました。退職し、一線を退いた今も毎日ボランティアとして休むことなく、事務の手伝いをしています。マザーの生き方は、カトリック施設としての示すべき姿を私たちに示してくれています。



## 無償の愛 ～ラインガルディス初代園長の記録から～

設立当初、園長だったラインガルディスが、当時の様子を書き残していました。ラインガルディスの記録を紐解きながら、マザー達がどのように奮闘されてきたのか、開設当時の藤の園の様子をご紹介します。

宮林署管轄の結核療養所の床は全て腐食していたので、新しく張り替えなければなりません。台町から毎日一人、あるいは数名のシスターたち、一般の職員たちがいらして助けてくださいました。お掃除、消毒と設備を整えることは考えられないほど骨の折れる仕事でした。お金が無いので、古いベットや折り畳みベットは自分たちでペンキを塗りました。沢山、沢山の犠牲を捧げました。(犠牲なしには何も偉大なことは発展しないのです。)

1962年4月23日、児童養護施設を開設するための国の認可が下り、5月15日、私たちは温かい心で最初の17人の入所児童を迎えました。この子どもたちが今後このホームで「我が家」を感じ、また、私たちの心の中に自分の場を見つけられますように・・・子どもたちは児童相談所の職員が盛岡と宮古から汽車で一関まで連れて来て、一関市のバスが駅まで迎えに行きました。その時から以前の長いひっそりとした家の中で、活気に満ちた生き生きとした生活と活動が始まりました。その後、数ヶ月経って、ホームの家族は少しずつ増え大きくなりました。11月1日には子どもたちは44名になりました。小・中学生が23名、幼児が20名、そして「A子さん」です。彼女は8歳の女の子ですが、小児麻痺のために話すことができませんでした。ほとんどの子どもたちは入所の時点で栄養不足でトラホームになっていました。眼科のお医者様が特別に治療のためにご尽力してくださり、治りにくいこの病気の治療を精力的に推し進めてくださいました。病んでいる目には、一日に2回、薄い塩水で洗浄され、それから目薬を差して治療しました。治療だけでは治る見込みがなかったので、夏休み中に6人の子どもが手術を受けました。また、その他にも沢山の病気の子もたちがいて、シスターたちは夜勤の日もあって、一日の勤務時間は長いものとなりました。乗り物が不足していたのでシスターたちは度々、子どもを腕に抱いてお医者様や病院まで連れて行きました。タクシー代は払えませんでした。自転車にかごを付けて子どもを乗せ、病院へ行くこともありました。シスターカリタスは調理室で働く傍ら、病人のお世話のためにも配慮しましたが、もう限界でした。他にも縫い物や修繕など夜遅くまで仕事があり、特にまだ多くの物が不足していて、整えなければならないことが沢山ありました。それでも、その新しい働きの上に神様の豊かな祝福を願うために礼拝や祝日をお祝いしやすくするよう努力して準備しました。



わたしにも教えて欲しんだけど・・・



ばんざい！ やっと春が来たよ～



おれのほうはうまいかも・・・



だれよ 泣かしたの・・・  
ちょっとこっちへいらっしやい！



将来の夢はお寿司屋さん・・・



やった！ そりすべりができるぞ



命のパンのみなさんいつもありがとう



英語は大事。若いうちに勉強を・・・



教区「絆のローソクリレー」



今日は卒園生を送る会です



何が入っているのかな？・・・



ぼく、上手にたまご、われるよ



白百合のお姉さんも来てくれました



とっても安いから買ってね♡

## あの日を忘れない・・・

私たちは、2011年3月11日を忘れてはいけ  
ないと思います。あの日から私たちの日常生活はすっかり変わりました。

震災から1年後の3月11日、私たちは、あの日を忘れないために、教会でお祈りを捧げ、当日の三食は非常食を食べて過ごしました。夕方にはキャンドルを囲み、震災で亡くなられた方々のご冥福を祈るとともに今私たちがこうしていられることに感謝しました。

夕方のキャンドルを囲んでの追悼会が始まる直前に、空を見上げると、白鳥の群れが薄暗くなった私たちの上空を飛んで行きました。とても印象的でした。

キャンドルを乗せる紙コップには一人ひとりが復興に向けてのメッセージを書きました。



## ご支援の御礼



震災以来、たくさんの方々から支援物資や寄附金を頂戴しております。また、ボランティアとして来園して子どもたちを励まして頂きました。

私たちは、支援物資や寄附金を頂く度に、皆様のやさしさを想い、感謝の気持ちで一杯です。紙面を借りて御礼申し上げます。

今年の3月に卒園した子どもが手紙を置いていきました。彼女の手紙にはこう書いてありました。

「私は約12年間、藤の園で生活してきました。最初のうちはいつも泣いてばかりで迷惑をかけていたのを覚えています。(中略)少し不便な面もありますが、今までこれたのも藤の園の先生方とみんなのおかげです。藤の園が嫌になったことも何度かありましたが第二の実家という感じなので、結局は大好きです。機会があれば顔を出しに行きます。

震災で学んだことを無駄にせず、生かしていきたいと思ひます。そして、今後は私がみんなに何かできればいいなと思ひています。12年間、お世話になりました。ありがとうございました。」

彼女は、震災で大変な思いもしましたが助け合うことの大切さを学ぶことができました。そのことを教えて下さったのは、支援して下さっている皆様方です。

## 改築計画 ～私たちが新しい園舎に込める想い～

新しい園舎の設計については、当初の計画の見直しをしており、まだ正式な図面等は完成しておりません。しかし、改築計画の当初から私たちが新しい園舎に込める想いは変わっていません。

東日本大震災では、ライフラインが寸断されたことや食料品が不足したことから、寒い体育館で1週間の避難生活を余儀なくされました。そのような教訓から新しい園舎のコンセプトが考え出されました。

### 1 災害に強い建物 ～子どもが安心して生活できる建物そして地域の避難所的な役割を担う～

建物の強度を通常の建物の1.3倍とします。外部電力が断たれても自家発電と井水により必要最低限のライフラインを確保します。災害の時には地域の方々の避難所的な役割を担うための、地域交流ホールやバリアフリーにも配慮した建物とします。

### 2 子どもの生活環境 ～6名～8名のユニットを6ユニット～

子どもの成長にとって住環境はとても大切な要素です。子どもたちがゆっくり自分のユニットや自室で過ごせるようにします。そのために1ユニット(6名～8名の子ども)を6ユニット設けます。ユニットはリビングやキッチン、トイレやお風呂などそのユニットで生活が完結する空間です。中高生は1人部屋とします。

### 3 自然再生エネルギーの活用 ～太陽光やバイオマスの利用～

60kwのソーラー発電、木質チップボイラー、薪ストーブ(各ユニットと地域交流ホール)、井戸水の利用などを計画しています。子どもたちにもエコについて関心を持てるような建物にします。

### 4 ランニングコストの削減 ～削減した経費を子どものために～

200ミリの外断熱材を使用し、できるだけ外気温の影響を受けないようにします。冬季においても室内を温かく保つようにします。また、全館を太陽光とチップボイラー、薪ストーブの熱によって床暖房にします。太陽光発電等により電気料や燃料費のコストを削減し、削減した経費の分を子どものために使います。

# 50th ふじのその50年のあゆみ



一関藤の園は、昭和37年5月15日、今から50年前に一関市の山目に産声を上げました。入所している子どもたちを含めると、今までに600人を超える子どもたちが藤の園で生活し巣立っていきました。以前は、物質的に足りないものがたくさんありましたが、職員も子どもたちも良く協力し助け合ったそうです。

草 創 期	昭和36.11	一関カトリック教会が元営林署一関療養所の 払下げを受け、殉教者聖ゲオルギオのフランシ スコ修道会日本管区に譲渡経営を委ねる。		
	昭和37.05	県の認可を受け、定員60名で発足 初代園長 ラインガルディス・アルタウス		
	昭和43.08	第2代園長 平澤颯子就任		
	昭和44.04	第3代園長 梅村サタ子就任		
	昭和45.04	定員70名となる		
	昭和47.04	天皇誕生日に当たり、事業奨励の目的によ り御下賜金を受ける。		
	昭和47.10	開園10周年記念式典挙行		
	昭和47.12	理事長 パウラ・ワイケル死去		
	昭和48.01	理事長 渡辺セツ就任		
	発 展 期	昭和48.10	体育館を新築、落成式を挙行する。	
昭和53.06		全館改築工事起工		
昭和54.03		全館改築工事竣工		
昭和57.04		第4代園長 相田和就任		
昭和57.07		理事長 梅村サタ子就任		
昭和60.04		第5代園長 菊地トシ就任		
昭和63.04		第6代園長 佐治淑子就任		
平成02.10		アフターケア・ホーム建設工事起工		
平成03.02		アフターケア・ホーム建設工事竣工		
平成03.09		創立30周年記念式典挙行		
飛 翔 期	平成04.07	理事長 本田守男就任		
	平成08.08	分園型自活訓練事業の指定を受ける。		
	平成09.04	定員50名となる。		
	平成12.07	第7代園長 小笠原綾子就任		
	平成15.02	定員60名となる。		
	平成15.11	児童居室の大規模改修を行う。		
	平成16.04	社会福祉法人藤聖母園(青森市)より分離 社会福祉法人ふじの園の経営主体となる。 初代理事長 本田守男就任		
	平成16.10	小規模グループケアホーム「アントニー ホーム」開設		
	平成17.04	地域小規模児童養護施設「マリアホーム」 開設		
	平成18.12	第2代理事長 中西秀吉就任		
平成21.04	第8代園長 マウエル・クリスタ就任			
平成21.09	洗濯棟を親子訓練室に改修			
平成23.03	東日本大震災により園舎被災			